第三十三講　潔めらるゝ事（六）パウロの二重人格　七章十四節―廿五節の研究（十二月十一日）

信仰は元來個人的である、他人の信仰を語るのではない、教會の信仰を語るのではない、又人類全體の信仰を語るのでもない、自分の信仰を語るのである、「我等が」ではない、「吾人」がではない、「人類又は教會が」ではない、「我が」である、「私が」である、複數ではない、單數である、第二人稱又は第三人稱ではない、第一人稱單數である、パウロは大宗教家であつたが、今日の宗教家の如くに單に一般的信仰を述べなかつた、彼れ自身の信仰を述べた、自身を信仰の實驗物として他人の觀察に供するを恥としなかつた、茲に彼の信仰の強味がある、「我は肉なる者にして罪の下に賣られたり」と、「我が願ふ所のもの我れ之を行さず、我が惡む所のもの我れ之を行す」と、「あゝ我れ困苦る人なる哉、この死の體より我を救はん者は誰ぞや」と、我れ、我れ、我れと自分の實驗を以て宗教的眞理を證明す、之よりも確かなる事はない、而して此信仰なきものは信仰又は宗教を語るべからずである、而して大なる宗教家はすべて此實驗を有つた人である、アウガステン、ルーテル、バンヤンらは皆この種の人であつた、「我れ」と言ひ得ずして「吾人」と言ひて人類全體の背後に己を隱すものの如きは、到底眞理を的確に紹介し、人を確實に救ふことの出來るものでない。

二重人格といふ言葉は心理學より出でたるものである、卽ち人は一人に非ずして二人……或場合に於ては二人以上……より成るとのことである、同一の人に於て惡人は善人に伴ひ、肉の人は靈の人に繫がると云ふのである、これ決して美はしき事ではない、人は一人たるを要する、善人は全部善人たるべきである、彼は其半面に

於て悪人であつてはならない、二重人格の人は決して理想の人ではない、彼は僞善者に類する者である、而して使徒パウロも亦二重人格の人であつたと云へば大抵の基督信者は承認しないのである。

然るに羅馬書七章七節以下に於てパウロは明かに自己の二重人格について述べてゐる、勿論二重人格なる文字を用ひない、乍併（しかしながら）その事實は明かに語つてゐる、「我れ願ふ所の善は之を行はず反（かえつ）て願はざる所の惡は之を行ふ」と云ひ、又「我自（みづ）から心にては神の法（のり）に服（したが）ひ肉にては罪の法に服ふなり」と云ふて確かに彼に二重人格のあつた事を證明するのである、卽ちタルソのパウロは一人のパウロではなかつた、善きパウロと共に惡きパウロがあつた、靈なるパウロと共に肉なるパウロがあつた、内なるパウロと共に外なるパウロがあつた、神の律法（おきて）を樂しむパウロと共に罪の法（のり）に從ふパウロがあつた。

茲に於てか說をなすものがある、曰く是れパウロが自己について語つた言ではない、パウロとも云ふべき人が斯くありよう筈がない、然り斯くあつてはならない、パウロは茲に不信者を想像し、其心中の苦悶の狀態を述べたのであると、しかし乍ら言辭（ことば）はあまりに明白である、彼は茲に「我れ」と言ひて「彼等」とは言はない、彼が不信者の有樣について述ぶる時には明白に彼等を指して言ふて居る（一章十八節以下を見よ）、茲に於てか更にまた說をなす者がある、曰く是れパウロが彼の不信者時代の狀態を述べたる言である、一たび信者となりし以上彼に斯かる煩悶苦闘の有りやう筈がないと、然し若しさうであるならば彼は何故明白にさう記さないのか、彼は何故茲に過去動詞を使はないで現在動詞を用ひて居るのであるか、何故明白に「我れ願ふ所の善は之を行はず（現在動詞）、反りて願はざる所の惡は之を行ふ（現在動詞、邦語聖書に行へりとあるは誤譯である）」と記して居る

のであるか、パウロは茲に明白に今ロマにある兄弟たちに向つて此言をなして居るのである、其時彼は確かに現在を忘れ得なかつたに相違ない。

されば羅馬書七章後半はパウロ自身の實驗、しかも其當時の實驗を述べたものと見るほかないのである、それは文辭そのものゝ上から見て明かである、他人のことを想像して記した場合に斯く生々（いきいき）した言葉の出る筈はなく、又過去の追懷の記述が斯くの如き鮮かさを有（も）つ筈がない、特にパウロの如き正直なる人に於ては目下實驗し居らざる事を實驗し居る如く記すことは全く不可能である、敬虔質實なる註解者にして之をパウロの其時の實驗と見るものが、カルビンを始めとして其の以降かなり多い、余は全然彼等に同意し彼等と同じ見方を採るものである。

文辭の解釋上より我等は右の見方の正しきを思ふ者であるが、更に進んで之を基督信者の實驗に訴へてみる時かゝる二重人格の苦悶が事實上基督者にあることは頗る明白である、苟（いやしく）も基督者が眞の基督者である以上、理想と實驗の矛盾より起る言ひ難き苦悶を必ず擔（にな）ふに相違ないのである、信仰に入りし後ち一回も此種の苦悶を味はずと誰か敢て言ひ得るものがあらうか、卽ち神に從はんとする心と肉に從はんとする心とが共に我衷（うら）に存して、そこに激烈なる戰が行はれつゝある事は凡ての基督者の實驗する所である、これ謂ゆる內心の分裂である、アウガスチンと云ひ、ルーテルと云ひ、クロムウェルと云ひ、バンヤンと云ひ、凡そ模範的の信者は何れも之を經驗したのである、之あればこそ靈を肉に宿せる所の人であると云ひ得る、之なき者は人でない、人以上か或は人以下である。

此事を述ぶるに當つて余は他人の實驗を幾つも紹介することが出來る、しかし實は其必要がない、なぜと云ふ

に余は茲に余自身を此實驗を味へる者として提出し得るからである、余は基督者となりて後ち凡そ五年を經て初めてキリストにある平和を與へらるゝに至つたものである、そして此以前に於ては勿論此以後に於ても、パウロが茲に記せる如き苦き經驗を味はざるを得なかつたのである、卽ち基督者となりて後ち此苦悶あり、キリストにある平安を獲し後とても多かれ少かれ此苦悶は存したのである、今も存するのである、斯く言ふは決して恥ではない、又信者の威嚴を損ずることではない、これは聖靈心にはたらく時に必然起る所の心中の波瀾、魂の呻きである、これ基督者を見舞ふ嵐である、パウロも此嵐の襲來をしたゝかに受けた人である、之は毫も怪むに足らぬ事である。

問題の別かるゝ所は第二十四、五節である、「あゝ我れ困苦る人なるかな、この死の體より我を救はん者は誰ぞや」と二十四節にはある、信者は勿論、不信者にても良心の銳敏なる人は此苦悶の哀聲を茫々たる宇宙に向つて發せざるを得ないのである、人は如何なる人と雖も二重人格者である、人には神の律法を喜ぶ半面と喜ばざる半面とがある、自己と自己とが戰ひつゝあるのが人である、自己の中にて光と暗とが爭ひつゝある故に上よりの光が人に臨めば臨むほど却てこの心中の矛盾、苦悶は激烈深刻となるのである。

我を救はん者は誰ぞやとの此疑問に對して普通人は「一人もなし、全宇宙に一人もなし、人生は斯かるものなり、矛盾と苦惱が人生の常の姿なり、故に永久に戰はんのみ、戰はんのみ」と答へる、これ可成り勇ましき決心である、しかし之れほどの決心を起し得ざる者は、人生はかゝるものなる以上この問題を說かんとするは愚、從つて斯る疑問を起すは愚なりと考へるのである、これ普通人の態度であつて、人をこの惱みより救ふ者は一人もなし

と云ふのである、然るに茲に少しく自信の強き人々がある、彼等は「誰ぞや」の疑問に對しては「たゞ我あるのみ」と答へる、彼等は言ふ、人は自分で自分を支配せねばならぬ、自分の惡しきは自分で之を改めねばならぬ、之は自分の責任として當然爲さねばならぬことである、他の者に賴りて改めて貰ふと云ふ如きは無責任であると共に不可能であると、其言は甚だ壯である、然し乍ら事實は言葉以上に雄辨である、彼等は自己の力を以て自己を改めんとするも事實上全き失敗に終り、依然として爲すべからざるを爲し、爲すべきを爲さざる狀態に止まるを以て終るのである、それにも係らず彼等は口だけにてはたゞ「我あるのみ」を繰返すのである。

この苦惱より我を救はん者は誰ぞやとの疑問に對して或人は「誰もなし」と答へ、或人は「我の外になし」と答へる、併し二者いづれも失望を以て終る點は同一である、然らば基督者は如何なる答を爲すのであるか、我を救ふ者は誰か、自己ではない、他の人でもない、如何なる偉大なる哲學者でもない、如何なる偉大なる思想家宗教家でもない、過去にありし凡ての人、今ある凡ての人——何人と雖も此苦悶懊惱より我を救ひ得る者はない、たゞ一人、人にして人ならざる者、神にして神ならざる者、一たび神性を脫して人となり今は神の右に榮光の坐にある者、卽ちキリストイエス、彼のみが能く此深刻たとひ難き苦惱より我を救ひ得る者である、「これ我らの主イエスキリストなるが故に神に感謝す」である、神の子にして人類の救主たるイエスキリストのみが我等の內心の分裂を醫し、苦悶を除きて我等を幸福に導き得るのである、彼を仰ぎ、彼に依り賴むとき內心の調和——苦悶の中に哀求せし所の調和——この調和が與へられるのである、故に「神に感謝す」るのである。

茲に一つの問題が起る、余は此苦悶を以て基督者の信仰に入りし後の實驗であると云ふた、パウロは之を記せ

し時に於て確かに此實驗を味ひつゝあつたのであると云ふた、然るに茲にまたキリストに依り頼めば此苦悶より救はると云ふ、この二つの考の間に矛盾はないであらうか、然り矛盾はない、此二つは共に吾人の實驗上の事實である、人はキリストに依りて明かに二重人格の苦悶より救はるゝ幸福に入るのである、しかし基督者の信仰生活は此幸福の絶えざる連続であるとは云ひ得ない、信仰に入りし者と雖も上を仰がずして自己を見つめる時は——信仰よりも良心と道徳とが多く問題となる時は——また舊の憐むべき二重人格の苦悶に陥るのである、故に信仰生活は此幸福と此苦悶との交錯であると云ひ得る、苦悶に入りて之より救ひ出され、又同じ苦悶を操り返し又同じ救ひを繰返す、これ實に信仰生活の常の姿である、もとより信仰の進歩は此苦悶の度を弱くする、内心分裂の苦みは信仰の進むと共に次第に強さを減じてくる、又苦しみに陥りてもより早く之より救ひ出さるゝ事が出來る、それは經驗上の明白なる事實であるが、此事は決して苦悶の消滅を意味しない、度合は弱くなり時は短くなつても苦悶はやはり苦悶たるに相違ないのである、いづれの基督者か其理想を完全に實現し得るものぞ、既に實際が理想までに達せぬ以上は其處に或る自己不滿、或る焦慮、或る煩悶はあるべき筈である、しかし主にありては、救はるゝ道は常に備へられて居るのである。

パウロの茲に述ぶる所は彼の屢々（しばしば）陥りし所の心的狀態である、彼も亦繰り返し繰り返し此のにがき經驗を嘗めたのである、嘗めざるを得なかつたのである、我等これを讀みて彼と我等との苦悶の共通を知りて、彼も亦弱き一個の人なりしことを學ぶと共に、又彼より平和歡喜の人となり得る秘訣を誤りなく教へらるゝ事を喜ぶ者である。

附記して云ふ、パウロは茲に決して單なる自己の苦悶を訴へたのではない、彼は現在も亦此苦悶の中にあることを述べたけれども、それは決して唯の失望懊惱の聲ではない、彼は明かに茲にキリストに因る救を說いてゐるのである、故に之は敗戰の哀號ではなくして勝利の凱歌である、呻きつゝ、悶えつゝ、苦みつゝ而かも高らかに發する所の凱歌である、實に力ある奏曲眞正の意味に於ての大文字である、深く鋭く強く人の肺腑をつく、けれども絶望の哀聲でない故に決して人をして失望せしめない、強く強く人を慰める、彼は呻きつゝ勝鬨（かちどき）をあげて走つた人である、偉大なるかな彼れ！　凡ての基督者の最上の模範たる彼れ！　彼の名の永遠（とこしえ）に讃へられよかし！

第三十三講　潔めらるゝ事（六）パウロの二重人格　七章十四節―廿五節の研究　現代語訳

信仰は本来、個人的なものである。他人の信仰を語るのではない。教会の信仰を語るのではない。また人類全体の信仰を語るのでもない。自分自身の信仰を語るのである。「私たちが」ではない。「われわれ」がではない。「人類または教会が」ではない。「私の」である。「私が」である。複数ではない。単数である。二人称または三人称ではない。一人称単数である。パウロは大宗教家であったが、今日の宗教家のように単に一般的な信仰を述べなかった。彼自身の信仰を述べた。自分自身を信仰の実験台として他人の観察に提供することを恥としなかった。ここに彼の信仰の強みがある。「私は肉的な者であり、売り渡されて罪の下にある者です」と。「私には、自分のしていることが分かりません。自分がしたいと願うことはせずに、むしろ自分が憎んでいることを行っているからです」と。「私は本当にみじめな人間です。だれがこの死のからだから、私を救い出してくれるのでしょうか」と。私、私、私と自分の体験をもって宗教的真理を証明する。これ以上に確かなことはない。そしてこの信仰がない者は信仰や宗教を語るべきではない。そして偉大な宗教家はすべてこの体験を持った人である。アウグスティヌス、ルター、バンヤンらはみなこの種の人であった。「私」と言えずに「われわれ」と言って人類全体の背後に自分を隠すような者は、到底真理を的確に紹介し、人を確実に救うことができるものではない。

二重人格という言葉は心理学から出たものである。つまり人は一人ではなく二人……ある場合には二人以上……から成るということである。同一の人において悪人は善人に伴い、肉の人は霊の人に繋がると言うのである。

これは決して素晴らしいことではない。人は一人であることが必要である。善人はすべて善人であるべきである。彼はその半面において悪人であってはならない。二重人格の人は決して理想の人ではない。彼は偽善者に類する者である。そして使徒パウロもまた二重人格の人であったと言えば、たいていのキリスト信者は承認しないのである。

しかし羅馬書七章七節以下において、パウロは明らかに自己の二重人格について述べている。もちろん二重人格という文字は用いない。けれどもその事実は明らかに語っている。「私は、したいと願う善を行わないで、したくない悪を行っています」と言い、また「私は、心では神の律法に仕え、肉では罪の律法に仕えているのです」と言って、確かに彼に二重人格があったことを証明するのである。つまりタルソのパウロは一人のパウロではなかった。善いパウロと共に悪いパウロがあった。霊的なパウロと共に肉的なパウロがあった。内なるパウロと共に外なるパウロがあった。神の律法を喜ぶパウロと共に罪の法則に従うパウロがあった。

ここにおいて、ある説を唱える者がいる。曰く、これはパウロが自分自身について語った言葉ではない。パウロとも言うべき人がこのような状態であるはずがない。そう、あってはならない。パウロはここで未信者を想像し、その心の中の苦悶の状態を述べたのだと。しかしながら言葉はあまりにも明白である。彼はここで「私」と言って「彼ら」とは言わない。彼が未信者の様子について述べるときには、明確に彼らを指して言っている（一章十八節以下を見よ）。ここにおいて、さらにまた別の説を唱える者がいる。曰く、これはパウロが彼の未信者時代の状態を述べた言葉である。一度信者となった以上、彼にこのような煩悶苦闘があるはずがないと。しかしも

しそうであるならば、彼はなぜ明確にそう記さないのか。彼はなぜここで過去形の動詞を使わないで現在形の動詞を用いているのか。なぜ明確に「私は、したいと願う善を行わないで（現在形の動詞）、したくない悪を行っています」（現在形の動詞、日本語訳聖書に「行えり」とあるのは誤訳である）と記しているのか。パウロはここで明確に、今ローマにいる兄弟たちに向かってこの言葉を語っているのである。そのとき彼は、確かに現在を忘れることができなかったに違いない。

したがって羅馬書七章後半は、パウロ自身の体験、それも当時の体験を述べたものと見るほかないのである。それは文章そのものの表現から見ても明らかである。他人のことを想像して記した場合に、このように生き生きとした言葉が出るはずはなく、また過去の追懐の記述がこのような鮮やかさを持つはずがない。特にパウロのような正直な人においては、現在体験していないことを体験しているかのように記すことは全く不可能である。敬虔で実直な注解者で、これをパウロのそのときの体験と見る者が、カルヴァンをはじめとしてそれ以降かなり多い。私はまったく彼らに同意し、彼らと同じ見方をとるものである。

文章の解釈上から私たちは右の見方の正しさを思う者であるが、さらに進んでこれをキリスト信者の体験に照らしてみるとき、このような二重人格の苦悶が事実上キリスト者にあることは極めて明白である。いやしくもキリスト者が真のキリスト者である以上、理想と体験の矛盾から生じる言い難い苦悶を必ず背負うに違いないのである。信仰に入った後、一度もこの種の苦悶を味わわなかったと、誰が敢えて言い得るだろうか。つまり神に従おうとする心と肉に従おうとする心とが共に自分の中に存在して、そこに激烈な戦いが行われつつあることは、

すべてのキリスト者の体験するところである。これがいわゆる内心の分裂である。アウグスティヌスと言い、ルターと言い、クロムウェルと言い、バンヤンと言い、およそ模範的な信者はだれもがこれを経験したのである。これがあるからこそ、霊を肉に宿している人間であると言い得る。これがない者は人ではない。人以上か、あるいは人以下である。

このことを述べるにあたって、私は他人の体験を幾つも紹介することができる。しかし実はその必要がない。なぜなら私はここで、私自身をこの体験を味わった者として提示できるからである。私はキリスト者となってからおよそ五年を経て、初めてキリストにある平和を与えられるに至った者である。そしてこれ以前においてはもちろん、これ以後においても、パウロがここに記しているような苦い経験を味わわざるを得なかったのである。つまりキリスト者となってからこの苦悶があり、キリストにある平安を得た後であっても、多かれ少なかれこの苦悶は存在したのである。今も存在するのである。こう言うことは決して恥ではない。また信者の威厳を損なうことではない。これは聖霊が心に働くときに必然的に起こる心の中の波瀾、魂の呻きである。これこそキリスト者を襲う嵐である。パウロもこの嵐の襲来を強く受けた人である。これは少しも怪しむに足りないことである。

問題が分かれるところは第二十四、二十五節である。「私は本当にみじめな人間です。だれがこの死のからだから、私を救い出してくれるのでしょうか」と二十四節にはある。信者はもちろん、未信者であっても良心の鋭敏な人は、この苦悶の悲痛な声を果てしない宇宙に向かって発せざるを得ないのである。人はどのような人であっても二重人格者である。人には神の律法を喜ぶ半面と喜ばない半面とがある。自分と自分とが戦い続けているの

が人間である。自己の中において光と闇とが争い続けているがゆえに、上からの光が人に臨めば臨むほど、かえってこの心の中の矛盾、苦悶は激烈で深刻となるのである。

私を救ってくれる者はだれかというこの疑問に対して、普通の人は「一人もいない、全宇宙に一人もいない、人生とはこのようなものだ、矛盾と苦悩が人生の常の姿である、ゆえに永久に戦うのみ、戦うのみ」と答える。これはかなり勇ましい決意である。しかしこれほどの決意を起こせない者は、人生がこのようなものである以上、この問題を解こうとするのは愚かであり、したがってこのような疑問を起こすのも愚かだと考えるのである。これが普通の人の態度であって、人をこの悩みから救う者は一人もいないと言うのである。ところがここに少し自信の強い人々がいる。彼らは「だれか」という疑問に対しては「ただ自分があるのみ」と答える。彼らは言う、人は自分で自分を支配しなければならない、自分の悪い部分は自分で改めなければならない、これは自分の責任として当然行わなければならないことである、他の者に頼って改めてもらうというようなことは無責任であると同時に不可能であると。その言葉は非常に壮大である。しかしながら事実は言葉以上に雄弁である。彼らは自分の力をもって自分を改めようとしても、事実上まったくの失敗に終わり、依然として行ってはならないことを行い、行うべきことを行わない状態にとどまって終わるのである。それにもかかわらず、彼らは口先だけではただ「自分があるのみ」を繰り返すのである。

この苦悩から私を救ってくれる者はだれかという疑問に対して、ある人は「誰もいない」と答え、ある人は「自分のほかにいない」と答える。しかし両者とも失望で終わる点は同一である。それではキリスト者はどのような

答えをするのか。私を救う者はだれか、自分ではない、他の人でもない、いかなる偉大な哲学者でもない、いかなる偉大な思想家や宗教家でもない、過去に存在したすべての人、今存在するすべての人――誰一人としてこの苦悶と懊悩から私を救い得る者はいない。ただ一人、人にして人でない者、神にして神でない者、一度神性を脱して人となり、今は神の右の栄光の座にある者、すなわちキリスト・イエス、彼のみがよくこの深刻でたとえようのない苦悩から私を救い得る者である。「私たちの主イエス・キリストを通して、神に感謝します」である。神の子であり人類の救い主であるイエス・キリストのみが、私たちの内心の分裂をいやし、苦悶を取り除いて私たちを幸福へと導くことができるのである。彼を仰ぎ、彼に依り頼むとき、内心の調和――苦悶の中で哀願した調和――この調和が与えられるのである。ゆえに「神に感謝する」のである。

ここに一つの問題が生じる。私はこの苦悶をもって、キリスト者の信仰に入った後の体験であると言った。パウロはこれを記したときにおいて、確かにこの体験を味わいつつあったのだと言った。ところがここでまた、キリストに依り頼めばこの苦悶から救われると言う。この二つの考えの間に矛盾はないだろうか。そう、矛盾はない。この二つは共に私たちの体験上の事実である。人はキリストによって、明らかに二重人格の苦悶から救われる幸福に入るのである。しかしキリスト者の信仰生活は、この幸福の絶え間ない連続であるとは言い得ない。信仰に入った者であっても、上を仰がずに自分自身を見つめるときは――信仰よりも良心と道徳が多く問題となるときは――また元の哀れむべき二重人格の苦悶に陥るのである。ゆえに信仰生活は、この幸福とこの苦悶との交錯であると言い得る。苦悶に入ってこれから救い出され、また同じ苦悶を繰り返し、また同じ救いを繰り返す。

これこそ実に信仰生活の常の姿である。もとより信仰の進歩はこの苦悶の度合いを弱くする。内心の分裂の苦しみは、信仰が進むとともに次第に強さを減じてくる。また苦しみに陥っても、より早くこれから救い出されることができる。それは経験上の明白な事実であるが、この事は決して苦悶の消滅を意味しない。度合いは弱くなり時間は短くなっても、苦悶はやはり苦悶であることに相違ないのである。どのキリスト者がその理想を完全に実現できるだろうか。すでに現実が理想に達しない以上は、そこに全体の自己不満、焦り、煩悶はあるはずである。しかし主においては、救われる道は常に備えられているのである。

パウロがここで述べる内容は、彼がしばしば陥った心理状態である。彼もまた繰り返し繰り返し、この苦い経験を味わったのである。味わわざるを得なかったのである。私たちはこれを読んで、彼と私たちとの苦悶の共通性を知り、彼もまた弱い個人的な人間であったことを学ぶとともに、また彼から平和と歓喜の人となり得る秘訣を誤りなく教えられることを喜ぶ者である。

書き添えて言う。パウロはここで決して単なる自分の苦悶を訴えたのではない。彼は現在もまたこの苦悶の中にあることを述べたけれども、それは決してただの失望と懊悩の声ではない。彼は明らかにここでキリストによる救いを説いているのである。ゆえにこれは敗戦の悲鳴ではなく、勝利の凱歌である。呻きつつ、悶えつつ、苦しみつつ、しかも高らかに発する凱歌である。実に力ある奏曲、真の意味においての大文字である。深く鋭く強く人の心につく。けれども絶望の悲鳴ではないゆえに、決して人を失望させない。強く強く人を慰める。彼は呻きつつ勝鬨をあげて走った人である。偉大なるかな、彼！ すべてのキリスト者の最上の模範である彼！ 彼の名

が永遠に湛えられんことを！